

普通の人間とコンビニ人間

佐藤 陽介

私自身コンビニが大好きで、それこそ暇があればコンビニに行く程のコンビニ中毒者なので、この本の題名を見た時、恐らくこの小説もきっと私のようなコンビニに依存している人の話ではないかと考えていた。しかし、この本の主人公は私の思う「依存」とは全く異なった「依存」をしていて、私のこの本に対する印象は読む前と後で百八十度変わった。

主人公の古倉恵子は、三十六歳独身であり、就職はせず、大学生の時始めたコンビニのアルバイトを十八年間続けている。中学校、高校ともにあまり周りの人やものに关心がなく、世界に接してこなかつた主人公はコンビニの店員として初めて社会との接点をもつことができたと感じ、就職をせず、コンビニ店員という形で生き続けていた。コンビニの中では完璧なマニュアルがあり、それに従つて「店員」になることはできたが、マニュアルの外ではどうすれば普通の人間になれるのかわからなかつたからだ。家でもコンビニ食を食べ、夢の中でもコンビニにいるような、コンビニが生活のほとんど

を占めるようになつていた。そんなすつかりコンビニ人間の主人公の働くコンビニに、ある日白羽という男が働くことになる。婚活目的の白羽はコンビニの女性客をストーキングしているのがバレてクビになり、居所のない白羽を主人公は家に招く。主人公のコンビニ依存を知った白羽は、主人公の「コンビニ的生き方」を強く否定し、就職するように促すが、アルバイトをやめた主人公の生活は大きく狂い始め、主人公は自分が人間である以上にコンビニ人間であると感じ、再びコンビニへと足を運ぶのだった。

私はこの本を読んで、初めはこの主人公がおかしいのかと思つた。だが、読み返してみるとおかしいのは主人公ではなく、「きちんと就職すること」や「結婚して子供を産むこと」で社会に貢献することを強制している世間かも知れないとも考えた。主人公は自分の働いているコンビニを介することで社会に接続している実感を感じていた。働き始めた時に「自分が生まれたと思った。世界の正常な部品としての私が、この日、確かに誕生したのだった」とまで表現した。就職や結婚というのも、主人公から見ると、「社会への接続方法の一

つ」に過ぎず、自分はその方法を選択しなかつた、というだけなのだろうか。この考え方はかなり達観していると思うが、間違つてはいないと思う。この主人公にとつてのコンビニが、私達学生にとつての学校だとするならば、そこまでおかしな話ではない。私の生活も学校を基準に回っているので、学校が休みの日でもある日のように起きてしまったり、校則を自分のルールのように考えて行動してしまったりすることがある。人間は大体何かしらの方法で社会と繋がっていて、それが人によつて違うだけなのだ。しかし、その方法が世間から良く思われないもの、いわゆる普通ではないものだつた時、周囲の人々はその異端者を攻撃し、矯正または排除しようとするのだ。「あんたなんて、はつきりいつて底辺中の底辺で、社員でもない、アルバイト。はつきりいつて、ムラからしたらお荷物でしかない、人間の屑ですよ」。これは、白羽が主人公に対して発した言葉で、ここまで言うかと思う程の毒舌で、印象に残つている。しかし主人公はこれに腹を立たせるわけでもなく、ただあきれたように受け返すのだ。私は、この主人公は普通の人とは全く異なつた価値観をもつてゐるのだろう

うと考えた。主人公は「コンビニ的生き方」を恥ずかしい、悪いなどと考えたことは一度もないのだ。どうして自分がこんな事を言わなければならぬのか、でもこの人は私のことを理解することはないだろう、といった思いで聞くしかなかつたのではないだろうか。

私は生き方の自由は誰にでもあると考えていたが、それは社会の中における自由であり、社会に全く繋がりをもたない生き方や「普通」の常識から外れた生き方をした場合、それは異端として糾弾されるだろう。知らず知らずの内に私達は「普通」というレールを踏み外さないよう歩んでいる。私達は社会の中に生きる人間であり、社会の秩序を守ることは大切だろう。しかし、ルールや秩序は守っていても「普通」とは異なる生き方をしている人もいる。主人公のような生き方をしたいとは思わないが、否定はできない。それを自分のあり方と信じて生きているからだ。他人に『こうあるべき』という価値観を押しつけ、白羽のように彼女の生き方を否定するの間違っていると思う。今の世の中で、多くの人は「普通」であることにこだわり、生きづらさを感じているのでは

ないだろうか。それならむしろ主人公のように達観して生きられたらとも思う。生きるとはどういうことなのかを深く考えさせられた一冊だった。